白冥の獄（はくめいのごく）1 上

王立学院の出会い

ジン・ヘイル

訳／原島文世

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

●頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の→キーを押して下さい。
もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。

●画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみて下さい。

●本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

LORD OF THE WHITE HELL BOOK ONE
by
GINN HALE

Copyright ©2010 by Ginn Hale
Japanese translation rights arranged with
Blind Eye Books
through Japan UNI Agency, Inc., Tokyo.
Japanese edition ©2013 by Chuokoron-Shinsha, Inc.

口絵・挿画　笹原亜美

目　次

第一章 …… 11
第二章 …… 20
第三章 …… 33
第四章 …… 49
第五章 …… 57
第六章 …… 63
第七章 …… 73
第八章 …… 78
第九章 …… 92
第十章 …… 98
第十一章 ……118
第十二章 ……138
第十三章 ……145
第十四章 ……149
第十五章 ……165
第十六章 ……180

ハビエル・
トルナサール
キラーム・
キル＝ザキ
フェデレス・
ケマノール
ネストル・
グルニート

登場人物紹介

エレザール・
グルニート
ドナミーリョ・
ウラコーン
ブラーショ・
ウラコーン
アトレーウ・
ベディヤ
アバラン神父
モリーショ・
カバダ

献辞

この本を馬のアンガスに捧げます。自分では知るよしもなかったけれど、すばらしい友でした。

謝辞

まず、ニコル・キンバリングとメリッサ・ミラーに心から感謝します。あなたたちがいなければ、この本――実のところ、どんな本も――書けなかったでしょう。

また、シカゴ・マニュアル・オブ・スタイルをあれほど根気よく使い、人生最高のヨーグルトを作ってくれたジェンマ・エブリホープにもお礼を伝えたいと思います。

アレックス、イアン、ジェームズ、ジョシュ、サムにはとてもお世話になりました。全員が多くのキャラクターのヒントと情報を与えてくれました。これ以上魅力的で精神力とユーモア、芸術性にあふれた誠実な人たちは望めません。わたしの文章力ではとうてい表現しつくせていないはずです。

最後になりましたが、本当に親切なレヴューや助言や意見をくれたすべての読者や作家仲間にお礼を申し上げなければなりません。たった一頁では載せきれないほど大勢の方々がいるという事実こそ、われわれの文芸界が実に寛大だということを映し出しているのです。

みなさん、ありがとうございました。

白冥(はくめい)の獄(ごく)1上　王立学院の出会い

第一章

田舎道に敷かれたでこぼこの丸石にぶつかって馬車がゆれ、キラームは目を覚ました。

眠れないまま六日も移動してきたのに、今日にかぎってうたた寝するとは信じられない。白い亜麻布のシャツは前が皺だらけになっていた。その様子に眉をひそめ、たれた裾を黒いズボンにたくしこむ。ふわふわの金髪はいつもひどい寝癖がついてしまう。手でとかそうとしたが、指でなでつけても巻き毛がはね返るだけだった。

持ってきた本『現代の機械装置』は馬車の床に落ちていた。頁のあいだから、覚え書きや図形を記した細長い紙片がびっしりと突き出ている。キラームは本を拾い、附箋の位置を直すと、羊皮紙の余りで注意深くくるみ、外套の大きなポケットにしまった。毛織の外套はカデレオン風のものだ。

衣類はほんの少ししか積めなかったし、愛読書もせいぜい二、三冊だ。馬車の大部分を占領しているのは、道具類や梱包された機械の部品だった。重量のせいで御者から通常の二倍の運賃を請求されることになったが、母は喜んで払った。キラームがサグラーダ学院に通う権利を得たのは、そのずっしりと重い、油でべとべとした金属の部品のおかげだった

からだ。

かつて同じ学院に在籍していたリフ＝ハルーンは、まさしく天空を変えるほど重要な数々の法則を発見した。王立公園にはその功績を記念して彫像が立っている。いつかキラームの像も立つはずだと信じている父は、位置まで示してみせたものだ。あの両親なら、許されればあと六台は馬車を連ね、祝賀の踊り手や赤く染めた鳩をつめこんで、末息子の到着を大々的に宣伝しようとしたに違いない。さいわい、学院は学生ひとりにつき馬車一台しか許可していなかった。

馬車がまたがたんとゆれ、ぐらついた箱を壁に押し戻す。赤いカーテンから日の光が射しこみ、内部を暖かく照らし出した。暗っぽい木の壁から遅い午後の熱気が放射されている。山越えのために着てきた茶色の外套姿ではいまやうだるように暑く、汗くさかった。キラームは外套を脱ぎ、窮屈な空間で長い脚をできるだけのばした。

もうサグラーダ学院から遠くないはずだ。あと一時間か、もっと近いかもしれない。

カーテンを寄せ、すぐ脇まで迫っている鬱蒼とした森をながめた。道をおおうようにのびた枝から懸巣が飛び立ち、あざやかな青の翼がひらめいた。木立をぬってなにか白いものがさっと動いたような気がしたが、道が反対側にまがったので見失ってしまった。

さらに進むと、からみあった茨や樫の大木が、手入れの行き届いた生垣や低い石垣で区切った畑に変わった。白い家鴨の群れが道端をよたよた歩いている。幼い少年が退屈そうに世話をしていた。

そのとき、耕地のはるか先に騎馬の人影が見えた。馬は純白で、騎手の肌もその毛色におとらず白いようだった。黒髪がその肌にくっきりと映えている。サグラーダ学院の紺色の制服もだ。

同じ制服があれほど自分に似合うとは思えない。あの騎手は先輩か、ひょっとして先生だろうか。す

らりとした青年が馬を駆り立てて石垣を跳び越える様子を、ただ茫然と見守る。人馬は道を横切って反対側の野へ走り去っていった。

　こちらの馬車も家鴨番の少年も、仰天した家鴨の群れさえ、青年は一顧だにしなかった。ほんの数秒で、馬と乗り手は遠くかすむ影にすぎなくなる。騎手の紺の上着を目でたどろうとしたが、やがてその姿は向日葵が咲き乱れる野にまぎれてしまった。

　胸が高鳴るのをおぼえた。あれこそ学院で待ち受けている未来だ。力強く恐れを知らず、毅然としていながら優美なもの。胸躍る冒険さえ待ち受けているかもしれない。

　何日も根気よく旅を続けてきたが、ぎしぎしと進むこの馬車が決して目的地にたどりつかないのではないか、と急に感じた。いまこそ学院にいるべきと強く感じているのに。憧れと昂奮が痛いほどに全身を駆けめぐる。

　学院を取り巻く分厚い石の城壁に近づくと、キラームは馬車の扉の掛け金をぐっとつかんだ。要塞めいた本館も、礼拝堂のきらびやかな青い尖塔もろくに目に入らなかった。同級生はいないかと、丸石を敷いた道や構内に広がる緑の芝生をじっと見つめる。紺の制服姿の少年たちが数人、ぶらぶらと礼拝堂へ向かっていたが、あの騎手ほど興味を惹かれる相手はいなかった。

　馬車ががたんとゆれて止まり、はずみでつんのめったキラームは、握りしめた掛け金をひっぱってしまった。たちまち扉がぱっとひらいたので、そのまま厩の正面のぬかるみに転がり落ちる。よろよろと立ちあがると、学者用の灰色の長衣をまとった年上の男がふたり、あっけにとられた顔でこちらを見ていた。そのすぐ後ろで、純白の馬の手綱を引いて立っていたのは、あの騎手だった。

「大丈夫です！」誰も訊いていなかったが、キラームはうけあった。「ただ……扉があいてしまって、よく見ていなかったので……」

頬がかっとほてるのを感じた。浅黒い肌でさえ、こんなに真っ赤になっては隠せない。すばやく立ったものの、案じている様子だった騎手が愉快そうな面持ちに変わり、いたたまれなくなった。端正な顔でほほえまれると、なぜか屈辱感が増す。キラームは相手をにらみつけてから、外套をとってこようと馬車の中に逃げこんだ。

また外に出ると、騎手は厩に入ってしまっていた。学者たちが急ぎ足で近寄ってくる。ふたりとも典型的なカデレオン人らしく、色白でがっちりした体格をしており、髪と目は褐色だった。

ひとりが年輩で、おそらく四十代後半だろう。短く刈った髪に白いものがまじっていた。もうひとりはキラームと十歳ほどしか違わず、二十七ぐらいに見えた。髪がいくらか長く、頬にそばかすが散っている。

「私はブラーショ・ウラコーンだ」若いほうの学者が自己紹介した。「こちらは兄のドナミーリョ・ウラコーン教授」

キラームは両方に会釈した。カデレオンの名前は聞き慣れない響きが多いので、発音にはとりわけ気を配った。自分たちハルディーム族のくだけた態度を無作法だと受けとるカデレオン人は多い。新しい教師に話しかけるにあたっては、正確な敬称を使うように心がけた。

「ブラーショ先生、ドナミーリョ先生、はじめまして。お目にかかれて光栄です。転入生のキラーム・キル＝ザキと申します」

礼儀正しい挨拶に、ブラーショ教授はにっこりした。「ようやく会えてうれしいよ。きみの馬車を見たとハビエルに聞いて、迎えに出たところだった」さっき騎手が立っていた位置を示そうとふりかえったが、誰もいなかったので眉を寄せる。「馬の手入れをしているんだろう。ちょうど厩の人手が足りなくなっていて――」

「そんなことはいい」兄のドナミーリョ教授が割っ

て入った。「職員や学生には夕食の席で正式に紹介されることになっているのだから」

ドナミーリョ教授の口調はブラーショ教授よりずっとよそよそしく、表情もきびしかった。ひとめで嫌われたに違いないと思わずにはいられなかった。秀才のはずなのに、馬車からぶざまに落ちたせいだろう。

ドナミーリョ教授はキラームの先に視線を向け、馬車の内部や屋根の上に積んである箱を見やった。「あれはすべておまえのものか？」

「はい、先生。今度の国王杯のために製作している機械の部品なんです」

ブラーショ教授がにやっとした。「はるばるアナクレートから運んできたのか？　実に熱心なことだ。すばらしい！」

キラームは褒められてうれしくなったが、感心しないというドナミーリョ教授の顔つきにも気づいた。「下男に荷ほどきさせよう」ドナミーリョ教授は言い渡した。「物置小屋のひとつを作業場として空けてある。製作には広い場所が必要だろうからな」

「ありがとうございます、先生」キラームはふたたび頭をさげた。「お手数をおかけして申し訳ありません」

「確かに、人の手を煩わせていると認識するのはよいことだ。二年次に新しい学生を受け入れること自体めったにない。まして個人的な研究に建物を使わせるということはな」どういうわけか、木箱を見渡しているうち、ドナミーリョ教授の厳格なおもてがやわらいだようだった。「おまえが前評判通りの天才であるよう祈っている」

〝天才〟と呼ばれて、またもや頬がほてると同時に、不安で胃がちくちく痛むのを感じた。まだ十七歳のキラームにとって、これまでの業績の大部分は父の発明が基盤となっている。独力で難問に立ち向かうのは今回がはじめてになるのだ。

「学院の名のもとに国王杯を勝ちとれるよう、精一

杯力をつくします」と、ドナミーリョ教授にうけあう。年輩の男はかすかな笑みを返すと、手をのばしてキラームのシャツから泥のかたまりを払い落としてくれた。

「長い旅のあとでは風呂に入りたかろう。ブラーショ教授に部屋へ連れていってもらうといい」

「はい、先生」キラームは外套と灰色の旅行鞄をつかむと、ブラーショ教授にしたがってみずみずしい緑の芝生を横切り、敷地を見おろす三階建ての石造りの建物へ向かった。

「これが寮だ。一年生は全員西棟の一階に入っている。以前武器庫だった部屋だ」ブラーショ教授は、本館から張り出した西棟を指した。窓には桟がついている。「全員が一室にいたほうが寮監の管理も楽なのでね」

一年生から入学するのでなくてよかった、とキラームは胸をなでおろした。騒々しいカデレオン人の少年が百人もつめこまれた部屋で寝るなど、想像もつかない。においだけでも頭がおかしくなりそうだ。

「二年生と三年生はともに二階で寝起きする。貴族法の規定で、爵位の後継者は四年次まで学院にとどまり、三階に個室を与えられる」

「あの見張り塔は？」キラームは三階から突き出た塔を見あげた。

「西の塔は倉庫として、東の塔は特別な場合に使われる」ブラーショ教授はいくぶん落ちつかない様子になった。「では、入ろうか」

建物の内部は薄暗く涼しかった。学院を象徴する青で織ったカデレオン貴族の紋章がずらりと壁に飾られている。扉という扉にサグラーダ王家の紋が黄金で象嵌されていた。ブラーショ教授は棹立ちになった馬の像を通り過ぎ、だだっ広い食堂を抜けて、堂々たる階段を上っていった。

「教室のうち四つは一階に、残りは東棟にある」階段を歩きながらブラーショ教授は教えてくれた。「食堂と一般用の図書室はこのすぐ下だ」

「なにもかも大きくてどっしりしていますね」キラームは意見を述べた。「なんだか要塞みたいです」

「かつて要塞だったんだよ。三百年前、第一サグラーダ王朝時代には、重要な砦のひとつだった。王政復古のあと、復位したサグラーダ家の王が寵臣のひとりに砦を下げ渡し、若い貴族に軍事学や法律学を教える場所にした。むろんそれからいろいろ変わったが、歴史的な経緯は忘れられていない。まさにこの足もとにその歴史があるんだよ」ブラーショ教授は階段で足を止め、下の階の床石に広がる放射状の黒い模様を指さした。

「あれこそ、カリクスト・トルナサールがはじめて白冥の獄と契約を結び、ミロゴスの侵略者どもを打ち破ったところだ」

キラームは黒いひびが蜘蛛の巣状に走った部分を観察した。白冥の獄だろうがなんだろうが、カデレオン人の地獄など信じていなかったが、穴だらけの焼けた床石を目にするとさすがに考えさせられた。古い要塞に立ち、学者が現場を示しながら語るのを聞いていれば、カデレオン貴族が魂と引き換えに侵略軍を撃退する力を手に入れた、という話ももっともらしく思えてくる。

だからといって本気にするつもりはなかった。喜びや思いやりを瓶詰めにして売ることが不可能なように、魂を売り渡すことなどできるはずがない。魂が肉体を離れるのは死に際してだけだ。

冗談を言っているのではないかと見やったが、ブラーショ教授は真剣な表情だった。

「カリクストの子孫は、いまだに白冥の獄と契約を保っている」と、意味ありげにこちらを見る。

畏れ入るべきなのか、嫌悪を示すべきなのかわからない。結局、率直に答えることにした。「ハルディーム族の伝統では、人間が地獄に落ちるとは信じていないんです。死ぬときにはすべての生き物が霊域を通り抜けて、新たな姿で生まれ変わると思っているので」

ブラーショ教授が眉をひそめたので、キラームは続けた。「もちろんうちの家族もそうですが、近ごろのハルディーム族は、聖なる森に霊域がひそんでいるとか、僧侶が霊域をひらいて生死を支配する力を手に入れるなんて本気で信じてはいませんよ。霊域が存在していたとしても大昔の話で、もうなくなってしまったんでしょう。実際には、誕生と死の均衡を示す比喩としてその手の物語を理解している人が大半です」

霊域を文字通り生と死の境とみなしているのは、きわめて敬虔なバヒームだけだ。何時間も木に話しかけるような迷信深い僧侶だと思われるのは勘弁してほしかった。

「本当か？」ブラーショ教授はわずかに首をかしげた。「すると、きみは地獄を恐れていないのか？」

「はい、申し上げた通り、地獄を信じていませんから。もっとも、霊域の話はなかなかおもしろいですよ」

ブラーショ教授はじっとキラームの顔をのぞきこんだ。「では、地獄の烙印を持つ者を恐れることもないと？　地獄への門を身の内にかかえこんでいるとしても？」

キラームはあっさりと肩をすくめた。「たぶん」

「たとえば、そういう相手と同じ部屋で寝るとしてもまったく気にしないのか？」信じられないと言いたげな口ぶりだった。

「頭がおかしいとか、疫病にかかっているとかいうわけじゃなければ、どんな人と同室でも気にしません」キラームは答えた。これは必ずしも真実とはいえなかった――もちろん泥棒や殺人犯と同じ部屋で寝たくはないし、正直なところ、体臭がおそろしくきつい相手も遠慮したい……

「なるほど、それはよかった。きみの部屋は三階になる。東の塔だ」ブラーショ教授はさらに階段を上っていき、キラームは早足で追いかけた。「ほかの部屋から離れているから、静かで勉強するには都合

がいいだろう。それに、ほかの部屋と違ってとても余裕がある」

ブラーショ教授はそわそわと生活する上での設備や調度を挙げたが、すでに東の塔が特別な場合に使われると説明しているのだ。この先がどう続くのかわかった、とキラームは単刀直入に切り出すことにした。

「つまり、誰か地獄の烙印を持つ人と同室になるってことですね？　トルナサール家の子孫と？」

「どうしようもないんだよ」ブラーショ教授はとう認めた。「ほかの上級生は、ハルディーム族と同室になるのはいやだと断ったんだ。学院に受け入れるのはかまわないが、寝ていて魂が無防備なときに一緒の部屋で過ごすのは考えられないということでね。だが、ハビエルはすでに霊的に……傷ついている状態だから、きみと同室になったところで危険はない」

眠っているあいだにぼくがなにをすると思っているんですか、と問いただしかけたが、そのときハビエルという名前に気づいた。あの騎手の皮肉っぽい黒い瞳がよみがえる。

「ハビエル？　白い馬に乗っていた人ですか？」

「ああ、ラウマ公爵ハビエル・トルナサールだ。彼がきみの監督生になる」

第二章

室内は余裕があるどころか、だだっ広くがらんとしていた。寝台がふたつ、向かい合った壁に接して置かれている。一台は木枠と敷布団しかない。もう一台は使いこまれているらしく、ざっと整頓してあった。脇に鏡つきの衣装箪笥と机があり、机の上には黒い革表紙の本数冊とインク壺、ペンナイフが置いてある。

いつもなら口実を設けて本をめくるところだったが、今回にかぎっては、ろくに注意を払わなかった。

そのかわり、赤褐色の細い曲線が螺旋状に描かれた床をまじまじと見つめた。まるで巨大な星図のようだ。

つかの間、ヤッシン・リフ＝ハルーンのことを考える。ひょっとしたら、あの有名な天文学者に敬意を表して、初期の図面を残しておいたのだろうか。だが、すぐに床の模様がどの星座にもあてはまらないと気づいた。それに、一世紀も前に書かれたにしては、インクの痕が新しすぎる。

細長い窓から光が射しこみ、楕円に囲まれている蚯蚓のたくったような見慣れない文字を照らし出した。インクの色は場所によって錆色から深紅まで変化しているように見える。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はＰＤＦ形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。